



変態祈祷師から逃げたら、  
海豚に犯され妊娠した話

*valencia*

(体験版)

## （体験版の為、途中からとなります。）

森は段々怖くなってきた。

「空木マネージャーが不倫をしていることは教えたでしょう」

「あ、谷明さんと……まさか、会社に言う気なんじゃ」

「それはリスクを負う価値がありません。前にも言いましたが、社内の人間は見て見ぬ振りですよ。仮に匿名で通報しても、色々調べられてバレる可能性が高いし、揉みつぶされて終わりでしょう。ただ、公になれば話は別です」

「林崎くん、一体何を……。それに、そんなことをすれば空木マネージャーの立場が……」

「自分の不始末が原因で、手一杯になり、やるべき仕事もしないマネージャーなら、去って頂いたほうがいいでしょう」

「林崎くん……」

社員に誘ってくれたと言っていたその口で、林崎が空木を切り捨てようとして

いることに森はショックを受けた。

「あと、社内のグループラインって使ったことありますか？」

「ええと、入社的时候に登録させられたけど……」

災害時の緊急連絡で、空木から一度連絡が来たきりで、森はまったく使っていないかった。

「グループラインで諍いの元になるような話をしたり、会社に居づらくなる証拠をあげたりっていうのも効果が期待できます」

「それじゃあ、今度は林崎くんが……」

止めようと、腕に縋りついた森の手に、林崎の掌が重なった。その手をとって、林崎が両手で優しく包み込む。

「危険は承知です。やり方が汚いこともわかってます。だから俺に勇気をくれませんか」

「勇気……？」

「俺にとって森さんは、それだけ特別なんだって信じ込ませてほしいんです。絶対

にバレないようにやります。自信もあります。だからあと少し、俺の背中を押してください」

「俺はどうしたら……」

いっそのこと、全てを投げ出し、逃げたい気持ちがあった。

森の手がすっと引かれる。林崎に引き寄せられ、一歩踏み出した先は、ラブホテルの入り口だ。

「ま、待って……ここって……」

「俺がリスクを負うぶん、森さんには……」

「身体で払わせる気か？ 呆れたな」

林崎の言葉へ被せるように、森の背後から声を高くして男が口を挟んだ。

「……社員さんが、派遣を尾行ですか？」

振り返ると、見知った顔がそこにいた。

ネクタイを外した少しラフな姿が、『3D AQUARIUM』の青く塗った壁にもたれ、腕を組みながらキツイ目つきでこちらを睨むように見ている。昨日森が

話した男、Xカード社員の海堂柊也だった。

「勘違いするな。外の空気を吸いに出てきたら、ホテル街でわが社の派遣社員を発見しただけだ。裏通りは静かだから、聞きたくなくても会話が筒抜けだぞ。まずい話をするときは気を付けろ」

「海堂さんだって人の事言えないじゃないですか。こんなところにいるってことは、海堂さんも誰かと一緒なんでしょう。お互いさまですよ」

「仮にそうだとしても、一緒にするな。俺は恩を押し付けて身体を求めるような真似はしない。それに、俺はイルカを見に來ただけだ」

「イルカ……」

森が小さく復唱した。

「まさか、そこに入ってたんですか。3Dホログラムの魚なんて、実際に見に來る人いたんだ……俺には理解出來ない趣味です」

「同僚に肉體關係を強要するよりも、健全な趣味だと思っぞ。……美波」

「え……」

名前を呼ばれ、森が顔を上げた次の瞬間、海棠に強く手を引っ張られる。林崎が慌てて森の腕に手をかけようとするが。

「ちよつと、何するんですか。俺が森さんを連れてきたのに……」

「悪いことは言わない。コンプライアンス違反で懲戒免職になりたくなかったら、手を引け、林崎くん」

## （中略※以下二十五年前の回想）

その場に押し倒され、押し掛かれた瞬間、何をされるのかがわかり、美波は柵也を押しつけて逃げようとした。

「美波、待て……」

後ろから手を伸ばして、ランドセルを奪われる。

「返せよ……放せっ、乱暴するな」

柊也に放り投げられた、黒いランドセルが、海堂家の船のデッキを転がり滑った。それを取りに行こうとした美波を、柊也は後ろから羽交い絞めにする。

「乱暴じゃない、セックスだ」

「何言って……む、んっ……」

再び唇を塞がれ、棧橋に押し倒された。強く唇を押し付けながら、柊也の手が美波の身体を這いまわり、白い制服の裾から手が侵入してくる。

「や……んあっ……」

首筋へ強く吸い付かれ、美波は思わず高い声を上げた。指先で乳首をこりこりと転がし、美波の身体を無理やり高める。もう一方の手がベルトを緩め、ハーフパンツの下の下半身を這いまわる。

「やめ……ろ……いやだ……」

ブリーフ越しに立ちあがりかけている物を擦られ、美波はぶるぶると首を横に振った。

下着ごと腰をむき出しにされ、膝を立てられる。

「いや、いやだ……それは、やめ……」

両肘を掴んで抵抗を示す美波の拳に、大して力は入っていない。柊也は指先で柔らかい場所に触れ、既に充分濡れていることを確認すると、両脚から衣類を抜き取り、片方の膝裏に手をかけて大きく脚の間を広げた。

「嫌だ、こんな格好……」

不意に高い鳴き声を間近で耳にする。

キュー、キュー……。

ふと自分の腹の当たりへ視線を下ろし、いつのまにかビルカが棧橋へ乗り上げていることに気が付く。海獣は丸いフォルムの嘴を擦り寄せ、美波の股間に迫っていた。

「ちよつと、……恥ずかしいよ……」

美波が狼狽えると。

「ビルカは今発情期だからな、興奮してるのかもしれない」

そう言って、柊也は美波の膝を持ち上げたまま、胴を跨いで背後へ回った。

ビルカが美波の陰部へ嘴を何度も押し付けてくる。

「や……やめて……あっ……」

予想以上に強い力で何度もその場所を突かれ、花卉が徐々に綻び始め、ペニスはすぐに立ち上がった。そして、先ほどまで柵也がいた場所へ、ビルカがするりと滑り込むと、今度はびったり身体を寄せる。

「ビ……ビルカ？」

美波が戸惑っていると、何か股間に触れ思わず視線を下げて確認した。

さきほどまで何もなかった白い腹部の一部が大きく縦に裂け、そこから先が尖ったピンク色の軟体動物のような物体が飛び出している。

「何……これ……」

戸惑っているうちに、それがぐねぐねと動き、美波の陰唇へ触れてきた。まさかと思った次の瞬間。

「あ……ああっ、やだっ……あ、ああああああああっ」

発情したイルカが、美波を雌と認識し、そのペニスを奥深くまで挿入した。

「嘘っ……嘘っ……」

子宮を押し潰す勢いで挿入されたビルカのペニスは、中でぐねぐねと動き、美波の中を押し広げた。

「あっ、んあっ、はっ、ああっ……ああんっ……」

徐々に美波の声の色めき立つ。脚を押さええていない方の柊也の腕が伸び、シャツのボタンを外して、美波の胸を露出させると再び乳首を触って来た。

ビルカのペニスは挿入してすぐに弾け、射精する。

「やあああああああああああああああああっ」

体長二メートルを超えるイルカの射精量は多く激しく、本来人間には受け止めきれない大量の子種を、直接子宮口へ浴びた美波は、その勢いの凄まじさに目の奥でチカチカと火花が散ったような感覚を味わった。